



名古屋学院大学 元学長
(現 法学部教授)

持田 辰郎



同窓会副会長

安藤 恵二



同窓会副会長

藪下 靖浩

変わらぬ大学愛を継承し、「ブランド力」を育てる支柱に。

保護者にも選んでもらえる大学に。

藪下副会長(以下、藪下) 私が同窓会のお手伝いを始めたのは30周年の記念事業で、おつきあいは20年ほどになります。同窓会の役員をしている先輩から「お前もどっか」と言われて断れなかったというのが本音です(笑)。

安藤副会長(以下、安藤) 昔は上下関係が厳しくて先輩の言うことは絶対でしたからね(笑)。私も同じく30周年からで、先輩から声を掛けられたのがきっかけです。卒業した大学に恩返しをしたいという思いもありました。今は時代が変わってしまい、先輩に言われたから従うという学生は少ないでしょうね。

藪下 入学式も卒業式も、両親、祖父母とともに参加する家族のイベントになっていて、大学選びでも家族の意見は重要度を増しているようです。学生はもろろん保護者にも選んでいただけるように、しっかりとした同窓会の組織があるから卒業後も安心だとアピールすることは、同窓会の役割の一つと言えるかもしれません。

持田名古屋学院大学元学長(以下、持田) お二人をはじめ、同窓会の皆さんには大変お世話になり、いつも感謝しています。私が学長に就任した2002年頃は、少子化でどの大学も学生募集に苦労していた時代で、名古屋学院大学でも思い切った変革が求められ、木村元学長に続き、若い世代の学長として50歳頃に就任しました。

安藤 瀬戸キャンパスから名古屋キャンパスへの移転が決まった頃ですね。

持田 こういった大きな変革の際は同窓会の反対ほど苦しいものではありませんが、皆さんにはむしろ背中を押していただきました。瀬戸と名古屋のキャンパスはまったく異なりますから、一つ変わるとすべてを変えなければいけません。教職員をはじめ、当時の学生からも不満や反発があってもおかしくありませんが、変革の必要性をご理解いただき、無事、移転を進めることができました。同窓会の皆さんには、いつも変わらず支えていただいています。

大学の成長が自分のことのようにうれしい。

安藤 50周年を機に、これからも大学と連携しながら、100周年に向けて、より良い方向を目指していきたいと思っています。私たちは同窓生の代表であり、皆さんからお預かりした大切なお金をどのように活用するのか、月1回程度、理事会で協議し、議事録に残し、決算報告も行っています。ホームカミングデー、会報誌の発行、ホー

ムページの充実、学生への援助など、議題は数多くありますが、十分に協議して無駄遣いのないようにしています。

持田 このように確立されたシステムを継承していくことが、長期的に安定した活動が持続できる理由の一つなのだ、感謝の思いでいっぱいです。

藪下 20年ほど同窓会に携わり、大学の成長を自分のことのようにうれしく感じています。世代交代が進み、同窓会も変化していくかもしれませんが、大学愛は変わらずに。名古屋学院大学の卒業生だと胸をはって言えるよう「ブランド力」を育てていく、同窓会がその支柱になるべきだと感じています。

持田 同窓会はいわばタイムマシンのようなもので、30数年前の卒業生が同窓会を支えてくださっている、では30数年後はどうなるのか。現在の学生が名古屋学院大学を卒業して良かったと感じてもらうことが重要であり、皆さんから良い点も悪い点も率直なご意見をいただきながら、選ばれる大学になるために、これからもお力添えをいただきたく、ご支援よろしくお願ひします。



名古屋学院大学
元学長

小嶋 博



同窓会会長

小川 博司



情報を届け、参加しやすい工夫で、より多くの同窓生に親しまれる同窓会に。

同窓会から生まれる新しいつながり。

小川同窓会会長(以下、小川) 小嶋先生が学長の頃、2009年に会長のお話をいただきました。私らしい同窓会の運営をしてほしいと、8年は続けるように言われましたね。それから9年務めさせていただいた

ので役割は果たせたかなと(笑)。

小嶋名古屋学院大学元学長(以下、小嶋) 県ごとに支部がある方が集まりやすいと、小川会長には富山、石川、福井と、北陸の3支部を立ち上げていただきましたね。北陸からの受験生は多く、夏期には父母懇談会を同窓会とタイアップして開催していました。当時は関東、中国・四国、三重の3支部しかなく、新たな支部の立ち上げは期待を集めました。

小川 地元でイベントを開催するようになって運営が安定しました。

小嶋 富山支部の講演会は好評でしたね。

小川 スポーツ健康学部の酒井淳一教授に講演をお願いして、福井や石川からも50人くらい集まっていたいただきました。支部を立ち上げて5、6年目のことです。組織を強固にし、拡大していくことは大変だと痛感しました。

小嶋 不動産部会を立ち上げたのも小川会長ですね。

小川 はい。同窓会には事業部会がありまして、その第一号として不動産部会を立ち上げました。最初は30人からのスタート。他大学と連携して東海地区不動産会が設立

され、今では15大学4000人規模の組織になりました。まだ、事業部会の第二号はありません。小さな規模でも新しいつながりが生まれると望ましいですね。

確実に成長する組織を、新しい世代へ。

小嶋 私が学長に就任した2005年頃は、同窓会の中心となる方たちが現役で働いている場合が多く、同窓会としてはまだ若く、これから10年、15年かけて基礎を築いて、強固な組織を作りたいと模索していた時期です。歴史の長い伝統校では全国の各支部が独立して活動を行うことができ、それぞれの地域で学生募集などを運営できる、これは理想ですね。

小川 同窓生は4万8000人、毎年約1350人ずつ増えていますから、確実に規模は大きくなっていきます。それをどのように統率し、組織化していくかは、同窓会に関わる皆さんのお力添えしだいですね。理事や監事、代議員のメンバーが若返ること、新しいことが発想できるようになっています。

小嶋 同窓生の多くは、大学が今、何をしているのかわかりません。母校に関心を持ってもらえるような活動が必要です。東洋経済に掲載されていたデータで、経営者の最終学歴が名古屋学院大学という記載が多いことに気づき、一社ずつ訪問したことがあります。「住所が変わったため会報が届かない」「長年出席していないので足が向かない」など、それぞれ事情はあるものの、訪問すると快く大学への協力を申し出てくださる方も多く、それが現在の「エグゼクティブ同友会」につながっています。

小川 ホームカミングデーでも、マグロの解体ショーや縁日を企画したり、テーマを設けて開催することでより多くの同窓生に参加いただけるようになっていきます。

小嶋 これからの時代を生き延びるためには「同窓生は大学を利用し、大学は同窓会を頼りにする」という連携を築いていくことが大切。同窓生の皆さんには、生涯学習やリカレント教育の場として、大いに活用いただきたいですね。

小川 より多くの方に参加いただけるような組織にしていきたいと思っておりますので、これからもご支援をお願いいたします。



小川 博司(左)、小嶋 博(右)



安藤 恵二(左)、持田 辰郎(中央)、藪下 靖浩(右)